



TESTAMENT

booklet note

Japanese

SBT2 1485

クレンペラーに劣らずブルックナー指揮者として有名なギュンター・ヴァントは、かつて「交響曲第5番がこの作曲家のカノンの中で最も複雑だ。」と言っている。オットー・クレンペラーのこの曲の演奏はいつも一大事件として扱われた。オーストリアやドイツ以外、特に1930年代アメリカではそうした傾向があった。1950年代のウォルター・レッグとの仕事では、実験的試みとしての色合いが強い。(ローベルト・ハース版が最終楽章の122小節を復活させた際に、クレンペラーはこの交響曲を大いに再考した。)

クレンペラーはこの交響曲を1927年7月に初めて指揮している。(同じく初めて演奏するベートーヴェンの大フーガとのプログラムだった。) ヴィースバーデン歌劇場での音楽監督時代の終わり頃、1932年10月にもこのプログラムを再演している。ベルリン国立歌劇場管弦楽団の首席指揮者に就任した際もこの作品を取り上げた。ところが、ベルリン・フィルも同じ曲をシーズン後半で予定していたため、フルトヴェングラーが直々にプログラムの変更を申し入れてきた。クレンペラーはこの申し入れを完全に無視し、実際コンサートで取り上げた。このコンサートは大成功で、クレンペラーの‘輪郭がシャープで明快、冷静な’演奏は、フルトヴェングラーの‘本質的にロマンティックな’解釈の評価を凌駕してしまった。Berliner Börsen 紙は「クレンペラーはこの壮大な交響曲が色の光彩と悲哀、そして高らかな讃歌を与えた。その様はこの交響曲が自ら望んでいたかのようにだった。構造は非常に明確で、最終楽章での知的統合は誰も今まで経験したことがないほど強かった...クレンペラーには一切の誇張がないからだ...すべてが平静をもって自制され完全な円熟へと導いた。」このシーズン、プログラムの変更を余儀なくされたのはフルトヴェングラーのほうだった。

ベルリンに続き、他の地でもクレンペラーはブルックナーの5番で大成功を収めた。フランクフルトでは「自身を通して作品の炎を解き放ったため、舞台上のクレンペラーは一個の肉体であると同

時に魂の楽器でもあった。」と評され、ライブツィヒでは「ゲヴァントハウスの年代記編者は、かつて内的にも外的にもこれほどまでに崇高なニューイヤー・コンサートがあったかどうか調べ直したに違いない。」という評論が掲載された。そして、同曲はザルツブルク音楽祭でも演奏された。聴衆の熱狂や大絶賛の嵐は一この時点では、クレンペラーのブルックナー演奏での大成功がその後新たな円熟期を迎える前兆であったことにまで気付いてはいなかったのだが一皮肉にも台頭するナチの注目も引き「ものすごい数の信奉者がいるが、大半はあいつと同人種だ」との中傷を受けるきっかけともなった。

1933年の4月、クレンペラーはナチス・ドイツを離れる決意をした。この際、2週間に渡りウィーンに滞在しウィーン・フィル・デビューを果たした。先の見えない亡命の日々のスタート地点においても、ブルックナーが関係する。クレンペラーはこのデビュー・コンサートで十八番であるブルックナーの8番を演奏したいと申し出たのだが、またしても変更の依頼があり、今回はこれを受け入れざるを得なかった。8番の代わりに5番が演奏されることとなったのだが、スコアの準備が間に合わず、クレンペラーはスコア無しでリハーサルを行うことを余儀なくされた。これに感動したオーケストラは普段以上の実力を発揮し「並外れて美しい Klangkörper（音の張り）」とまで評された。この演奏は、クレンペラーとウィーン・フィルの恋愛にも似た絆を生んだ。—35年の月日を経て実現したウィーン音楽週間でのブルックナー演奏においてもこの情熱は消えてはいない。（SBT8 1365 に収録）

作曲家コルンゴルトの父、ユリウス・コルンゴルトは、クレンペラーを‘ブルックナー建築のマイスター’と呼んだ。有能な指揮者スカウトとしても知られたウィーン・フィルの新しい長でありファゴット奏者であったフーゴー・ブルクハウザーはこう述懐する。「終楽章の二重フーガが最高潮に至る部分の衝撃力は、かつて演奏した際には到達し得なかったほど強力だった。この時以前は、フルトヴェングラーとワルターが最高のブルックナー指揮者とされていたが、デビュー時と音楽週間での演奏で、クレンペラーこそがブルックナーの交響曲の最強最善の指揮者であることが証明された。—クレンペラーの解釈はクラシック音楽としての枠組みと明確で一貫したリズムを保持しつつも、より深遠なものを表現してみせた...ワインガルトナーとシュトラウスと共に失くしてしまった何かを取り戻してくれたのだ。」

アメリカが — そして想像しづらいのだが、ロサンジェルス・フィルの首席指揮者というポジションが — クレンペラーの次なる放浪の地であった。1935-36年のシーズンには、ストコフスキーが辞任したばかりのフィラデルフィア管への客演も果たした。この時はいきなり蜂の巣を突つような騒ぎとなった。第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンを対向配置に変更させ、ブルックナーの5番と一緒にマーラーの《亡き子をしのぶ歌》を演奏すると発表した。ブルックナーについてはこの都

市では 1907 年以来演奏されたことすらなかった。「満員にはならなかった。」クレンペラーはウィーンに戻っていた妻に手紙を書いている。「ここらの聴衆はブルックナーが嫌いらしい。なぜ演奏したのかって？何か演奏されたことがない曲を開拓したいと思ったわけじゃない。—この音楽にもっと興味を引きたくただけだ。オーケストラも最初、それほど熱心じゃなかったが、今はこの音楽に確かな喜びを感じているようだ。」

ニューヨークへのツアーの際は、よりポジティブな聴衆と評価を得た。New York Times 紙のオリン・ダウンズの評論はこうだ。「たぶん、これ以上ない演奏だった。クレンペラー氏はブルックナーの声で語った。まるでそれが彼のネイティブ言語であるかのように。聴衆を惹きつけようとする賭けはすべて放棄した。」クレンペラーがトスカニーニと会って話したのも、ちょうどこのツアー中だった。トスカニーニは偶然にも、彼の手兵ニューヨーク・フィルとブルックナーの 7 番でコンサートを開催中だった。

もちろんクレンペラーは、ロンドンでの長いフィルハーモニア時代にも早い時期にブルックナーの 5 番を取り上げた。しかしながらウォルター・レッグは、クレンペラーのブルックナーでの成功の歴史を知りながらも、相変わらずイギリスでの興行としてのコンサートへの客やレコード購買層が 4 番、7 番、8 番以外の交響曲に興味を示すとは思っていなかった。この盤に収録されたコンサートのちょうど 1 週間前にあたる 1967 年 3 月に、ついに（ニュー）フィルハーモニア管と 5 番の録音を成し遂げた。この録音に対してグラモフォン誌のデリック・クックは DG のオイゲン・ヨッフムの盤と比較したレコード評を書いているが、驚くべきことにこの評は 30 年前のベルリンでの評論の論調にかなり近いものである。「クレンペラーは荘厳に構成を保っている...頂点は第 1 楽章と終楽章に置かれており、ここで音楽を支離滅裂にしないためにはしっかりとした構造の把握が必要不可欠だ。とりわけ、この堂々とした終楽章における彼の考察はすばらしく論理的で、一拍目から終小節まで一貫している。」

おそらく、ロンドンでブルックナーの 5 番に回帰した 1967 年という年と、クレンペラーが音楽制作の領分を拡大した（もしくは立ち戻った）時期とは完全には一致しないであろう。この 3 月、クレンペラーはダニエル・バレンボイムとの初共演でモーツァルトのピアノ協奏曲第 25 番をコンサートで取り上げている。（録音もしている。）このコラボレーションはベートーヴェンのピアノ協奏曲全集にも発展した。本質的に伴奏を好まなかったクレンペラーにとっては異例なことである。マーラーの 9 番にもコンサートと録音両方で再演した。この頃親しくなったピエール・ブーレーズによりオール・ストラヴィンスキーのコンサートにも足を運び、さらには自身のオペラ作品《ダス・ツィール（目的地）》を再考しプライベートで実演し、なんとすべてのパートを自身で歌うことまで計画していた。クレンペラーは当時 82 歳、それでも非常に活動的だったのだ。

この盤に収録されているシューベルトの《未完成》は現存している中では 9 つ目の録音にあたる。最初期のディスクであるベルリン国立歌劇場管との 1924 年盤にはじまり、フィルハーモニアとの EMI 盤、そしてライブ録音としては、ブダペスト、トリノ、エルサレム、ミュンヘン、ウィーン、ロンドンと続く。（後ろの 2 つは Testament からリリースされている）この交響曲は常にクレンペラーのお気に入りであり、この指揮者の武器である木管セクションの均衡がいかんなく発揮される作品でもある。1865 年、ウィーンの初演時に書かれたエドゥアルト・ハンスリックの評論がある。「短い導入部の後、クラリネットとオーボエのユニゾンによる‘歌’が始まる。バックにはヴァイオリンの穏やかなざわめき。誰もがこの作曲家の才能に気付く瞬間だ。こうして聴衆は音にならない“シューベルト”のささやきを聴くのである。」

ブルックナーの交響曲第 5 番のためのコンサートのオープニングにクレンペラーが《未完成》を選んだのは、耳障りな音を極力減らし、より音楽的な関係性を重視したためだと考えられる。戦前であれば、より好きだったベートーヴェンかマーラーを選択していたかも知れない。

Mike Ashman, 2012

訳：小林茂樹